

今、僕が立っているのは、東京のど真ん中・渋谷のさらにと真ん中、ラブホテル街として有名な道玄坂にある、ライブハウス・TSUTAYA O-EASTの屋上だ。僕はここで、仲間とともに畑を耕し、野菜を作っている。まさか、こんな場所て野菜を育てている人間がいるなんて、誰も気が付かないだろう。

面白いのは、こんな都会のただなかでさえも、やろうと思えば畑が作れて、野菜が育てられるということだ。確かに、都内で空き地を探すのは難しいが、屋上やベランダならいくらでもスペースは見つけられる。

僕は、本や雑誌の編集をしたり、原稿を書いたり、広告の企画や制作をすることして得たお金で暮らしている。だから、農業によって生計を立てる人のことだけを農家というならば、農業でお金を稼いでいない自分は、農家ではないことになる。それでも、僕は、朝早く起きて、畑へ出かける。「それって、単なる趣味の家庭菜園なんじゃない？」といわれると、それは随分と気分が違っているように感じる。自分や家族が食べる分の野菜を自給することを目的にしているわけでは

ないし、かといって、単純に土いじりや畑作業が好きだからしているわけでもない。

自分のことを、こうしてうまく説明できないもどかしさは、畑の楽しさをうまく伝えられないもどかしさと似ている。それは、いつも畑に立つたびに感じることだ。いや、「さあ、畑に出るぞ」と、着替えたり、長靴を履いたりしている時から、僕の意識はバチンとスイッチが変わる。その瞬間から、空気の匂いを嗅ぐようになり、空を眺め、風の強さを感じ、今、ここにいる自分を取り巻いている自然へと意識は吸い込まれていく。すると、暑いとか寒いとかだけの言葉で判断していた、その日その場所が、そんな言葉だけでは到底説明しきれないくらい、複雑で多様な空間であることが感知される。そして、畑で土や作物の様子を眺めると、さらにそこには、もつともつと複雑で多様な世界が広がっていることに圧倒される。もうこの時点で、僕の脳は、普段仕事している時の脳とは全く違った感覚に突入している。

例えば土。夏と冬では土の色も、匂いも、感触も、重さも、全てが違う。土にいる虫たちも違う。畑に立っただけで、こういった凄まじい量の情報に僕は包まれる。いちいちひとつひとつ感じたことを言葉に置き換えて理解するなんて無理だし、そんなことはする必要もない。

かつて、世界には、あらゆる音階の音楽が溢れていた。ところが、ピアノが誕生したことで、ピアノの音階で再現できない音楽は、音楽ではないとされ、どんな世界から失われてしまったという。この、ピアノの音階では表現できなかった、世界中に溢れていた色んな民族が奏で、踊っていた、音楽の音色の豊饒さは、そのまま、言葉という音階では収まりきれない、畑や、農業が僕に伝えてくれる豊饒さと同じようなものではないか。

でも、だからといって、ブルース・リーの言葉「Don't think, feel」な、ただその場を感じているわけでもない。脳と畑が直結すると、普段は使っていない本能のようなものが起動し、五感、体の細胞ひとつひとつが目覚めていくような、フレッシュな感覚が脳を歓喜させる。それは、早朝の深い森を歩いている時の瑞々しさであり、フジロックなんかのフェスでお目当のバンドが登場してきた時の全身がゾゾゾーとしていく興奮であり、愛する人とのセックスを終えた時の安らぎでもある。

そんな、日々の暮らしの中では、どれもがスペシヤルな瞬間の喜びが、まあるくすべてひとつに溶け合って身体中に流れ込んでくるような、最高の時間。これが、僕が畑にすることが大好きな理由だ。こうして書いているだけでも、畑に行きたくなる。結構、重度な畑ジャンキーなのかもしれない。この快感を一度味わ

ってしまおうと、もう抜けられない。その上、自分で種をまいた野菜が、芽を出し、雑草や虫たちと戦いながら、時間をかけて成長していく姿は、何度見ても感動するし、そうして収穫した野菜を口に入れた時の嬉しさ、美味しさは、言葉にできない。

では、いったいどうして僕が、渋谷で畑を作るようになったのか？

このあとの本編では、僕が農業に携わるようになったいきさつや、その間に起きた出来事の数々、そして旅をしながら各地で出会ったオルタナティブでユニークな農家の人々の物語も交えながら記していきたい。

農業は英語でアグリカルチャー (agriculture) という。Agriは土を意味するから、土から生まれる文化とでもいうことになるのだらう。渋谷はファッションや音楽や様々なカルチャーが交錯する街だ。そんな街から、人類史上最古でありながら人間が生きている以上、未来まで果てることなく続いていくカルチャーである農業を育てていきたい。

都会と農村なんて堅苦しく考えず、もっと気軽に、自分たちの遊び場を作るくらいのも楽しみ方で、都市の中の畑が増えていけばいい。きつと楽しいはずだ。僕らが暮らし、僕らが働き、僕らが遊ぶ、僕らの街を、さあ、畑にしよう。

僕は
渋谷の
農家だ。